陰符經
全

267
770

序

陰者冥也。符者合也。冥合天地之謂也。謂之經者尊焉耳。傳爲黃帝書。有所歸也。怪言奇語。非倫者。而前而後。見於行間。雖然處世之道。利賴莫尚焉。乃略釋之。教童蒙知其要云爾。明治四

十四年。歳次辛亥。七月八日。遠
藤隆吉識於巣園學舍。

陰符經

文學博士　遠藤隆吉 述

序言

本書は僅か四百四十四字の文章なれども古來道家の金科玉條として珍重する所なり。陰符經と言ふは陰は暗默の意にして符は符合の義なり。即ち造化の理に默契するを言へるなり。去れば此書は人間が造化の理を得て其儘に實行することを主としたるものと謂ふべし。

上篇

觀二天之道一。執二天之行一。盡矣。天有二五賊一。見レ之者昌。

天とは天地自然と言ふが如し。天地自然の道を見て之を行へば足ることなり。天人合一の思想は此二句に於て發揮せらる。天に五行あり。水は火を、火は金を、金は木を、木は土を殺すものあるが故に之を五賊と云ふ。陰符經は俗人の見得ざるが如き甚深の處に於て宇宙の眞理を發見せんとするものあるを以て、其語の使用法も亦自ら一種特別なる者あり。五行が互に相賊する所を見て之を五賊と云ふ。這般微妙の理を見得たる者は則ち繁榮すべし。

五賊在心。施行於天。宇宙在乎手。萬化生乎身。天性人也。人心機也。立天之道。以定人也。

五行の氣は吾身中に在つて活動するものなり。善用すれば仁義禮智信となり、惡用すれば喜怒愛樂欲となる。若し天の理に從ふ

て善用すれば宇宙は手中に在るが如く又萬般の變化は自己の身より生ずる如き感あるべし。

凡そ天の附與したる先天の性は人の人たる所以なり。然るに俗人の心は必ずしも天理に從ふこと能はず。言はば機にして善にも働き惡にも働くべし。天の道を標準として以て人心をして之に則らしめざる可らず。

天發殺機。移星易宿。地發殺機。龍蛇起陸。人發殺機。天地反覆。天人合發。萬化定基。

凡そ宇宙の現象を觀察するに陰あれば陽あり、陽あれば陰あり。互に原因たり結果たる者なり。世人は只生々發展を見るのみなれども此れ即ち陽性にして其の之れある所以のものは陰性の氣

之れが因たるに由るなり。此微妙なる所を觀察して以て此一章を成せり。天に陰氣あるが爲に天の變化を生ず。星を移し宿を易ふるもの是れなり。地に陰氣あるが爲に龍蛇の活動するなり。吾人須く天地自然の理に從ふべく、殊に陰が陽の源となることを心得、これに從つて以て活動すべし。則ち天地に在るが如き活動を其儘反覆し居ることゝなる。人發殺機、天地反覆と言ふは是れなり。此くして天人合發し同く陰陽の理に從つて活動する所より宇宙の一切變化の根本を見るべきなり。

性有巧拙。可以伏藏。九竅之邪。在乎三要。可以動靜。

人間の性には巧なるあり。拙なるあり。天地自然の理に從つて

之を調伏するに勉めざる可らず。人の世に生活するに當り最も人心を亂す所の者何んぞやといふに即ち九竅に外ならず。兩眼兩耳と鼻孔二口及び大小便の穴各一と是れなり。是れあるがために心は外物に制せらる。故に邪と謂ふ。殊に甚しきは耳目口の三者なり。之を三要と云ふ。耳は聲を受けて心をして之に傾注せしめ目は色を容れて心をして之に傾注せしめ口は味を知りて心をして之に傾注せしむ。此等の竅を塞ぎ人心をして動かざらしむるもの是れ實に精神修養の第一義なり。而も絶對的に之を塞ぐこと能はず。故に動くべき時に動かし靜かなるべき時に靜かならしむ。即ち可以動靜と言ふ所以なり。凡そ道家の理想は内視反聽に在り。外を見ずして内を視外を聞かずして内を

聽くと云ふが如し。

火生於木。禍發必尅。姦生於國。時動必潰。知之修錬。謂之聖人。

陰陽の理は相互に根となるものなり。陰が陽の源となり福が禍の源となる福必ずしも長からず、禍必ずしも長からず。互に相生じ相滅するものなり。彼の周易の根本思想も亦全く此にあり。陰符經は之を實踐に應用せんとするのみ。火は木より生じ禍害の至る處木を滅す。惡人は國内より生じ、時節到來國家を破ることあり。斯の理を知つて能く精神を修むる者之を聖人といふ。以上にて上篇は終りなり。中篇以下の綱要も亦此に外ならず。只深く心に味ふを要す。

中篇

天生天殺。道之理也。天地萬物之盜。萬物人之盜。人萬物之盜。三盜既宜。三才既安。故曰。食其時。百骸理。動其機。萬化安。

天には陰と陽とあり。陽は生ずるを掌り陰は殺すを掌る。生と殺との並び行はるゝ者自然の理なり。天地萬物人との三者に就いて考ふるに天地は萬物を生ずれども亦之を殺すものなり。即ち萬物に取りては盜と謂ふべし。萬物は人の耳目を動かし之をして其心を失はしむるものあれば人に取りては盜と謂ふべし。然るに人の萬物に於るや之を食て以て成長する者あるが故に亦盜たるを免れず。三者互に相盜たり眞人は這般の消息を洞察し

萬物の人を盜むに因りて之を制し天地の萬物を盜むに因りて之を制す。即ち自然の道に從つて以て自然を制す。三盜既に其處を得。人天地と相並んで以て參なるべきなり。故に古語に曰はく食ふに其の時を失はざれば體內百骸皆其理を得。動くに其機を以てすれば天地自然の理に從ふて何事も成就せざることなし。

人知其神而神。不知不神而所以神。

神にして神なるは外に見はれ昭々として明かなる所にして淺見者流の能く觀察し得る所。神ならずして神なるは一見明かならざる所に於て却て深遠の理ある者にして達人を須て始めて能く洞見し得る所なり。微妙の理豈俗眼の瞥見を容れんや。

日月有數。大小有定。聖功生焉。神明出焉。其盜機也。天下莫能見。莫能知。君子得之。固躬。小人得之。輕命。

日月の運轉するや一定の法あり。大を陽となし小を陰となす。陰陽各其の則あり。而して天地の活動あり。此に神明の德を見るべし。至人は此の理を知りて以て之を應用する者なり。之を盜機と云ふ。君子は斯の機微ある理を得て以て其身を固むれども小人は却て其命を輕んずるに至るものなり。以上は中篇の大要なり。其根底に於ては上篇と異なる所なし。陰陽自然の理に從ふと是れのみ。凡て常人の見得ざる所に於て甚深微妙の理あることを知るべし。

下篇

瞽者善聽。聾者善視。絕利一源。用師十倍。三返晝夜。用師萬倍。

盲人は耳に聰明にして聾者は目に瞭然たり。精神の一方面を塞ぐ時は必ず他の方面に於て其勢力を發揮することを得。外に向て精神を消耗せしむる勿れ。乃ち導引の術を行ふよりも十倍の効あり。若し又其術に從つて實行し三晝夜之を繼續せりと假定せんか其效實に導引に萬倍すと謂ふべし。導引の術は道家の慣用方法にして肉體を精練せんとするものなり。

心生於物。死於物。機在目。

心は外物を見るよりして生ずるものなり。外物の誘ふことなくむ

ば心も亦存するとなし。心と外物とは相對する者なり。其要如何といふに即ち目に在り。目は三要の一にして就中重要なるものなり。目を蔽ふて見ざる時は精神の紊亂せらるゝ憂あることなきなり。

天之無恩。而大恩生。迅雷烈風。莫不蠢然。至樂性餘。至靜性廉。

天は無情の者恩なきが如くなれども一切萬物皆天に依つて生す。大恩ある所以ならずや。迅雷烈風も亦天の爲めに蠢然として起り來るものなり。故に自然の理を知りて之に從ひ天と一なるものは至樂にして其性綽々として餘裕あり。又至て靜かなる性は自ら廉なるものなり。

天之至私。用之至公。禽之制在ㇾ氣。

天は其神變不可思議なる所より見れば至て私なりと雖も其活動の流行する所より見れば至て公平なるものと謂ふべし。其の然る所以のもの如何。即ち一氣の作用に存するのみ。禽は擒なり、制なり。萬物を制御するを謂ふなり。

生者死之根。死者生之根。恩生ニ於害一。害生ニ於恩一。

陰陽は反對の性にして互に因となり果となる者なり。生は死の因、死は生の因なり。恩は害より生じ害は恩より生ずる者なり。木は冬に遭ふて害され來年を待て生ず。生ずるが故に復た冬殺に會ふ。乃ち生死と恩害とは互に因たり果たるものなり。

愚人以天地文理聖。我以時物文理哲。人以愚虞聖。我以不愚虞聖。人以奇期聖。我以不奇期聖。沉水入火。自取滅亡。

甚深の理は俗士の窺ふ能はざる所。天地の表面に見はれたる文理を以て聖となし此に於て驚嘆す。我は則ち時物の文理生死恩害の互に伴ふ所を見て以て哲となし神妙となすなり。世人は聖人の韜晦深藏を悟らず。以て愚となす。或は衆人の臨機適宜を解せず。以て奇となす。誤る所以なり。眞に聖人を知るものは以て愚にあらず。又以て奇にあらず。理に從ひ常に行ふものとなすのみ。鳥の水に沈み蟲の火に入る、皆自ら滅亡を取る所以。天地の道を究めざるもの、自ら禍を招く所以亦實に此くの如し。

自然之道靜。故天地萬物生。天地之道浸。故陰陽勝。陰陽相推。而變化順矣。

陰符經の主とする所は靜に在り。靜が動の根底なればなり。人の大に活動し得る所以も亦先づ其心を靜かにし、沈思熟考すればなり。自然の道は無形無名、至て靜かなり。萬物の生ずる所以なり。天地の道は水の浸入するが如く自然にしてのみ。而して陰陽相勝ち相推し一切の變化行はれざる所なし。「故」の字必ずしも拘泥すべからず。

聖人知自然之道不可違。因而制之。至靜之道。律歷所不能契。爰有奇器。是生萬象。八卦甲子。神機鬼藏。陰陽相勝之術。昭昭乎進於象矣。

聖人自然の道の違ふ可らざるを知る。故に自然に從ひて以て之を制す。至靜の道即ち天地の道は律歷の如き精數も能く契合する能はざる所あり。故に名けて奇器と謂ふ。一切萬象の生ずる所あり。八卦、十干、十二支の理の如き、神の機に動き鬼の藏する如き、凡そ陰陽相勝の術、皆形而上の妙理。之を耳目の間に求めんとするは抑も難し。

以上は陰符經の大綱なり。今其の要點一二を擧げんに左の如し。

一、凡そ世に處するには何事に依らず心を靜かにし、其理を觀察すべし。莊子の養生主、亦此意に外ならず。二、事物は必ず其裏面より之を觀察するを要す。禍中福あり。福中禍あり。之を知りて修養するを大人となす。困難に逢ふて捲土重來の勢を呼び

起すも亦全く此に在り。陰符經を讀む者は須らく這般深遠の所に着目し、以て大成を期せざる可らず。老子、周易の二書は殊に參照を要すと云爾。

陰符經　大尾

明治四十五年五月十二日印刷
明治四十五年五月十四日發行

陰符經　定價金八錢

著作兼發行者　東京府下巣鴨村二六三九　遠藤隆吉

印刷者　東京府下巣鴨村二六五三　松任吉太郎

印刷所　東京府下巣鴨村二六五三　巣園學舍印刷部

發行所　巣園學舍出版部